

一わがまち歴史探訪、足もとの文化遺産への誘いー
ミュージアム都留からのお知らせ

芭蕉のさと企画展 **甲斐俳諧展『甲州の自然と変容する文化』**

甲斐俳壇は、江戸時代にあつては独立性の少ない存在でした。大都市からの来訪者による影響のもと、その都度、変化してきたのです。これは何も甲斐俳壇だけの特徴ではなく、全国の地方俳壇そのものがそうした性格を備えていました。つまり、地方俳壇を地方の視点から素描しても、あまり意味はないこととなります。

今回の展示では、大都市からの来訪者に照準を定めて甲斐俳壇の実情を展示してあります。これまでこうした視点からのアプローチはなく、山梨県史あたりもおざなりな記述しかしていないのが現実です。

江戸時代の甲斐俳壇にあつて特筆すべきは、国中地域と郡内地域とがまったく異なる性格を有していたことでしょう。

国中地域は、江戸の宗匠・岸本調和の指導のもとに発生していきます。甲斐俳壇最初の出版物『俳諧白根嶽』(貞享2年)は、記念碑的な存在といえます。岸本調和一瀬調実との交流の具体を報ずる「一瀬調実改名記」も貴重な資料です。甲府を中心とする俳壇は、ここから発生していききました。

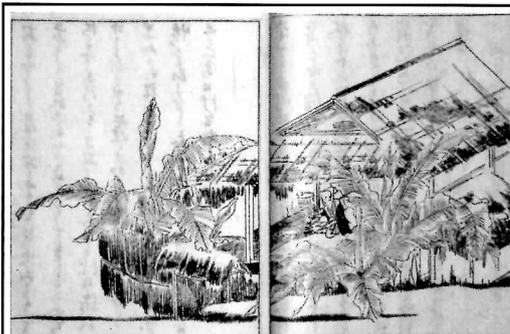
対して都留を中心とする郡内においては、秋元藩の家老・高山樂塙が松尾芭蕉と、天和年間(1681～83)に親密な関係を構築しました。その結果、天和3年の夏(4月～5月)の数10日間、芭蕉は谷村を訪問します。芭蕉は天和2年末の江戸大火によって、類焼の憂き目にあい、やむなく谷村に避難するしかなかったのです。芭蕉の庵と大火の様子を『芭蕉翁絵詞伝』でご覧ください。芭蕉来訪の具体は地元においては、正確に知られていないようですが、高山家の子孫が残した記録を『俳諧真澄鏡』に見ることができま

す。この記述は谷村における芭蕉来訪を報ずる決定的な資料といえます。その後、大淀三千風・松木珪琳・中川宗瑞・山口黒露らが甲府を来訪し、その折々に甲斐俳壇は変質していききました。その具体を展望しやすいうように、展示したのが今回の企画です。ことに三千風の序文がある『寄生』(元禄8年頃刊行)あたりは、その存在も認識されておらず、三千風研究にとって貴重な資料といえます。

甲斐俳壇の大枠を展望すると、既述のような状況になります。調和にせよ、芭蕉にせよ、黒露にせよ、今回の展示は、俳壇の実情を他国からやってきた人に注目しつつ、大きな視野で素描したものです。これらは、富士山ゆかりの俳書や谷村の国絵図などを示しながら、江戸時代の俳壇展望への招待になっています。

新たな視点のもとに、甲斐を訪れた人々と甲斐俳壇の実情を認識していただければ、幸いです。

会期	2月15日(日)まで
時間	午前9時～午後5時(入館は午後4時30分まで)
観覧料	一般 300円(210円) 高・大学生 200円(140円) 小・中学生 100円(70円) ※()内は20名以上の団体料金です。
休館日	毎週月曜日、第3火曜日、祝日の翌日 ※館内燻蒸のため、2月20日(金)から28日(土)まで臨時休館します。



芭蕉庵の様子 「芭蕉翁絵詞伝」より

芭蕉は延宝8年(1680)江戸の日本橋から深川の草庵に移り住みました。そしてこの庵を拠点に全国を旅しました。また、新しい俳諧活動を展開し「古池や蛙飛びこむ水の音」などの名句や「奥の細道」などの紀行文を残しました。芭蕉庵の名前の由来はこの辺りに芭蕉の株が生い茂ったところから名付けられました。

勝山城跡学術調査見学会のお知らせ

平成17年度から4年間にわたり続けてきた勝山城の調査成果を市民の皆さんに知っていただくため、遺跡見学会を次の日時に開催します。

日時 3月8日(日)午後1時30分～3時30分

集合場所 ミュージアム都留

定員 30名程度

参加費 100円(保険料)

申込・問合先 ミュージアム都留

☎(45)8008

※勝山城への登山道は、大変滑りやすくなっています。履き慣れた靴で参加ください。杖などは各自で用意してください。

増田誠美術館

画伯が描いたふるさとの風景 開催中!

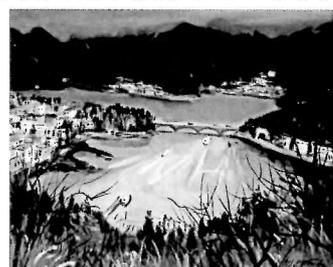
増田誠が市内の各所で描いた風景画を中心に展示しています。

会期 2月22日(日)まで

開館時間 午前9時
～午後4時30分

会場 増田誠美術館
(ふるさと会館2階)

休館日 月曜日、第3火曜日、
祝日の翌日



「河口湖」

増田誠が河口湖天上山から描いた河口湖です。